

鹿地亘

暗い航跡



鹿地 亘

暗い航跡



暗い航跡●鹿地 亘

昭和47年7月15日 発行

定価 六八〇円

著 者 鹿 地 亘

発 行 者 藤 山 真 人

発 行 所 株式会社 東 邦 出 版 社

東京都千代田区神田神保町二丁目二八
電話 東京(二六一)五七二五、七
振替 東京 八五二七五

印刷・日大印刷 製本・美成社

暗い航跡・目次

第一部

第一章 急湍……………7

第二章 平らかな河道……………49

第三章 懸崖……………86

第二部

第一章 開 火……………	129
--------------	-----

第二章 ベーカー・エーブル事件……………	173
----------------------	-----

終 章 電波の秘密……………	215
----------------	-----

あとがき……………	258
-----------	-----

第一部

第一章 急湍

たしかその日は午前ちゆうは小雨が降っていたのではなかったか？ わたしの間借りしていた別荘の芝生のしめり、百日紅の木肌、濡れて光る庭石などが目に残っている。午後には翻訳のことで訪ねてきた出版社の友人の長居に疲れ、ベッドに横になって応待し、一休みして夕食のあと、外気に触れたくなり、オーバーを付添看護婦のふみ子から肩にかけてもらって外に出た。しっとり水気をふくんだ柔らかい砂地の感触が足に快かった。

つい歩度をのぼし、江の電鵲沼駅に出る。もう暗くなっていた。線路沿いにそこからひつ返す。オーバーのポケットに手をつっこみながら。それはいつもの癖である。もちろんあとからいいがかりをつけられるような「武器」など握りしめていたわけではない。出がけにふみ子が突っこんでくれた百円札一枚をたしかめ、つぎの柳小路駅前の雑貨屋で煙草を買

って、帰りは電車に乗るつもりだった。

このうえなくぐやかなきもちだった。右手に別荘のまばらに断続する丘、左手に電車の軌道。軌道を越えた向こうにもまた松林のなかに石垣を積み上げた住宅が点々としていた。しみいる静けさが心を慰めた。というのも、昼間はすぐ眼と鼻の先の辻堂海岸で、緊迫をつづけている朝鮮戦場に送りこむ米軍部隊の上陸演習が、附近の住いの窓硝子にひびを入れるはげしさで、連日つづけられていたということがある。夕方になってそれがぼったり止んでいた。ほっとさせるような安らぎがあたり立ちこめていた。それがまた強い紫外線の直射を避けなければならぬ病状にあるわたしの習慣的な散歩時間でもあった。

散歩といっても、医者がまだ正規にゆるしていたわけではない。気分さえよければ、自分の体力に合せてそぞろ歩きする。医者はおおめにみてくれる。そこに長期療養者だけが知っているなんともいえない解放感があった。

ちょうど鵲沼と柳小路の両駅のなかほどにさしかかる。そのとき彼らが尾行していたのかどうかは知らない。あるいはしていたのだろう。だが、こちらは意識の片隅にもおいてはいなかった。ふと向こうから米軍人を乗せた一台の乗用車がきて、狭い道をすれちがったが、あとから思えば、それは彼らがこちらの顔をたしかめるためだったのにちがいない。ま

もなく車がひっ返してきた。

わたしはヘッドライトに眼をくらませながら右がわに道をよけた。車は徐行してきて、すぐ横に停る。助手席とその後のドアがひらき、二人の軍人がおりてきて、さりげなく傍に寄る。道でもたずねるつもりだろうか？ いや、そうではない。もうそのときには、わたしもようすが尋常でないのを感じとっていた。

おっ、どうするつもりか！ だしぬけに躍りかかった二人が両がわからわたしの腕をつかむ。左からきた長身の若いのが思いきりの一撃をみぞおちにくれる。

「うっ！」と息がつまって、わたしは前のめりにしゃがみこむ。その両腕を後手にひねりあげ、二人の大男がわたしを引きおこし、泳がせるようにして、いっぱい開いた後部車床にはこびこむ。内がわからもうひとりの手をのばし、襟首をつかんで、ひき入れる。抑えつけたまま手錠をかませ、絹の白布で眼かくしをし、二人が両側から挟んで座席に抱えあげ、ばたんとドアが閉り、車は迂り出した。

あつというまもない。いや、そういつては違う。抵抗力のないわたしを三人がかりでさらいこむあいだにも、電光石火に意識ははたらいっている。

△これは一体どうしたことだ！ 私をどうしようというのだ。助けを呼んでもむだだ。人目はない。それにここの別荘地

帯で、だれをあいてにできるわけもない。無益な抵抗で体をいためるより、ひとまずなりゆきにまかせ、あいての落ちつきを待つがよい。彼らが人違いをしたのかもしれない……Vとっさにつけぬけたのは、その考えだった。眼をふさがれていても、案外車のなかのようすはわかる。きおいこんで右がわから腕をおさえているのが、先刻の一発をくれた若ざうで、後日わかったところでは、それがグラスゴー准尉だった。車のなからわたしを引きこみ、今は左がわから挟んでいる中国系米人ふうののっぺりした平服の二世が、通訳の平井だった。わたしを襲ったもう一人の皮ジャンパーを着たのがキャノン。こいつが指揮者らしい。彼は助手席に乗りこみ、発車するとまもなく後をふりかえり、△うまくいったなVともいうような眼顔をしたらしい。通訳の平井が「うふっ」と追従笑いを返し、うなずくけはい。

どうやら、そのもうようでは計画的な襲撃らしい。だが、こいつらはいったいなにものだろう？ このわたしをどうしようというのだろう？ こちらを知ってのことか？ それとも人ちがいではあるまいか？

やっと呼吸がいくらかとのい、口がきけるようになったとき、わたしはまず強くあいてがたの理不尽をなじり、病人だからすぐこの場でおろしてくれといった。平井がそれを通訳すると、キャノンとグラスゴーが鼻先でせせら笑った。

キャノンが後をふり返り、低く抑えた声で、

「きみはコムミュニストだね。秘密共産党員だろう？」

そうか、やっぱり……そんなら、まんざら人ちがいでなさそうだ。

「トクダがどこにいるか知っているかね？」

「なにか感じがいでしよう。おろしてください。」

「ふむ。きみの名は？」

「おろしてくれ！」

ずしっと重い打撃が膝頭にきて、しびれる痛みが走る。顔半分を白布に包まれた内がわで、わたしは歯をくいしばる。いまいまいかがりだ。狂犬に噛まれたようなものだった。わたしは共産党員ではない。あいてはあてずっぽうにきいてゐる。わたしはむしろ腹をたてた。

「きみの名は？」

「知らない！」

第二の打撃。助手席から乗り出したキャノンが、なにか特殊なえもので殴りつけてゐる。

「きみの名は？」

「知らない！」

第三の打撃。

「自分の名を知らないはずがあるか！ きみの名は？」
「そんならいいおす。答える必要がない！」

がんがんと力まかせに三つきた。ぐっとこらえる。若さうのグラスゴーが右がわから首を扼して締めあげようとした。だが、息をつめ、しっかり顎をしめた首には腕がよくはまらない。

「よし！」と力んで、彼は狭い車席のなかで、こちらに居なおり、右手をとって内巻きに巻きあげた。めりめり骨がひびいり、砕けそうな激痛に、思わずあっと声が出た。キャノンが「もうよい、もうよい」と笑って、拷問がかりの手がゆるむ。わたしは首をしめられたあとの呼吸をあえがせながら、手錠のかかった手でオーバーのポケットからハンカチをとりだし、口をおさえ、粘液まじりの唾をしきりに拭いとる。

「おだやかに話をつけるはずだったのに……これでは、いきちがいになってしまふ……」いい知れぬくやしさとともに、その反省がきた。

「きみは肺をやられているね？」

「肋骨のない病人ですよ。おろしてください。」

「なん本骨をとった？」

「七本です。」

「その病気はこちらでなおしてあげよう。どうだ、月額五万だそう。ぼくらの仕事に協力しないか？」

そらきた！ わたしはむかむかしってくるのをおさえながら、「ぼくの病気はなおりませんよ。」

「なあに、なおるよ。日本の錠医者じゃだめかもしれないが、アメリカの医術も薬も進歩しているからね。」

わたしはかすかに苦笑しただけだった。

「まあいい、今夜はこれから熱海にいった、ゆっくり話しあおう。」

△では、こいつらのアジトが熱海にあったのか？……▽

すべてが一方的だった。まるでこちらにとりあおうとはしていない。わたしはもはや口をきくまいと腹をきめた。このうえの問答になんの意味があるだろう。屈辱を味わわされるだけではないか。△あれだな！▽という直感、ここまでくれば、もう疑う余地もなかった。

無言のうちにも車は走る。どういふことになるか？とにかく、なりゆきにまかせるしかない。こちらにどうすることもできないのだから。とんだ災難だ。とりかえしのつかない不運……。

さまざまの断想が、一時にわきおこり、乱れたフィルムのようにもつれあい、かすめすぎた。△あれだ！▽というのは、自分の過去にひとつの記憶があるからだ。松川、下山、三鷹……それはもうわたしが「再起不能」、このままではあと一年の余命と医者に宣告され、手術のため病院のベッドのあくのを待っているあいだのことだった。だが、それらのすべてより、いまきかされた「熱海」の一語で、またなまなま

しくよみがえってくるのだった。

揚子江の支流、嘉陵江が重慶市を挟んで本流に落ちあう地点から、二十キロ足らず北に遡ったあたり、峡谷がひらけて盆地になり、延長三十キロに及ぶ高圧電線の鉄条網の柵が丘や林を囲い、その内がわの丘の凹みや樹林の蔭に、点々と隠れる白い建物が自動車路に結ばれていて、峡谷の西壁をなす標高五〇〇メートル足らずの歌樂山の山稜に立つと、盆地を貫流する江を中心に、ひろびろとした山波の海の全景が一望におさまった。まだ小説「紅岩」は世に出る時代ではなかったが、その舞台になっている政治囚特殊収容所としての「白公館」は、山麓に近い峡谷にかくれたそれらの建物の一つだった。そこは地獄だ。今そこに自分が運ばれようとしている。

△ちくしょう！ わなにかかった。口惜しい限りだが、こうなってはしかたがない。ばあいによつては……▽
わたしはふいの遭遇への応接をあわただしく考えめぐらせてみたが、このさいやはり一応最悪のばあいの覚悟をきめておくほかないのを感じた。

△それにしても、こんなものが入ってきていたなんて……いや、それがきていないなどと思うほど、おれも無邪気じゃない。勝手きままにふるまうことのできる占領者として、彼らがきている以上、この国だけが例外であるはずもない。だが、今の今まで自分がしてやられるなどとは、夢にも思いもうけていなかった。不覚のいたり……療養ほけとはこのことだ……

△▽
粘液痰がひっきりなしに出た。それを拭きとりながら、わたしは糸ひとすじほどにかけてきたこれまでの病氣恢復、社会復帰の希望がこっぴみじんに打ち砕かれるのを、深い絶望で自覚した。

△これでおしまいだ。それにしても、あまりにばからしい。もし、これがまえもって覚悟しておかなければならないような事情でも自分にあつたのなら、まだあきらめもつく。ところが、どうだ。心ないやつらのために……▽

そのきもちがわたしをやけくそにした。とり落してこなごなにした焼き物のかけらを、ひろい集める気にもなれないようなものだった。

またしてもひとつの画面が眼に浮んだ。それは解放後の重慶だった。一人の婦人がハンカチを眼にあて、「白公館」の

焼け跡に探しあてた夫の腐爛死体のまゑに膝まずき、小さい男の子がその傍に呆然と立っている。わたしはその写真を北京から送ってきた文献で見ている。

どれだけ多くの犠牲者たちが闇から闇へ消えていったことだろう。そこは生きながらの墓場だ。人しれずさらいこまれたものたちは、ふたたび「人間」のぬうちをもつてはこの世にもどれない。それも「政治犯」というのなら、まだわかる。たとえば、ある種の技能者、あるいはある種のたくらみの条件に合致したため、彼らの視野にとらえられたもの、さらにまたたまたま見てならない場面をかいまみただけの気の毒なめぐりあわせのもの、それらがみな犠牲に供されたのだ。

最後に解放軍の足音が迫ってきたとき、犯罪者どもはその犯跡をくらますため、生き残っている囚人たちに機関銃の掃射を浴せかけ、建物ごと火を放って逃げ去った。みわけもつかないほどの焼死体だけが、彼らの残したすべてだった。だが、それだけ残せたものはまだ幸運だったといつてよい。声のないことばで、それらはせいっぱいに犯罪者を告発しているのだったから。影も形も残さなかったものも数知れずいる……。

つたない運命にむしゃくしゃしながら、今ごろはもう帰り

がおそいのに不安にされているふみ子のが、ふと頭をよぎる。彼女はこのあと、夜どおし居ても立ってもいられなくされてしまうことだろう。気だてのいい、明るい娘……度を失っているその顔が見える。だが、それも今では別世界のことだ。一瞬にして、すべてが手のとどかない過去に断ち切れてしまった……。

そのとき、ふとキャノンが後をふりかえり、いくらか得意げな薄笑いを浮かべているような低い声で、

「きみ、ぼくらをどんなものと思うかね？」

△知ったことか！ おまえたちはギャングだ。▽

「陸軍か？ 海軍……それとも空軍……？」

「さあね。」

「ふむ、なに？ なんだって？」

「わからないといっています。」

平井が勝手な通訳をすると、彼はふふんと鼻を鳴らした。

光のなかに入るのは街区にきたしるしだ。眼かくしされた姿が人目を惹かないように、平井とグラスゴーがわたしを座席におし伏せ、抑えつけた。踏みきりの遮断機が降りるのに出あうごとに、平井がいらだたしげに舌打ちし、グラスゴーがそれとわかる拳銃をわたしの脇腹におしつけた。密集している光のなかで、彼らがすべなく緊張しているのが手にとるようだった。けれども、騒いだところで、意味はない。市民

はまだやつらにかかわるのをはばかり、警察はその手先にされているのだったから。そのうえ、なによりどうにもならないのは、自分の肺活量が半分以下にも減っていて、閉めきった車窓の外まで声をとどろかせるには、自信がもてないことだった。

二時間近くも過ぎたころ、タイヤが砂利にきしみ、車が停る。車ごと車庫に入れられるけはい。キャノンとグラスゴーが車を降り、外を偵察してもどってきた。

「いまのうちに！」と、キャノンが命じた。わたしは車を降ろされ、両側から腋を支えられ、静かな空地をわたり、建物の蔭へ入る。暗くて狭い階段をなかに担ぐようにして運び上げられ、光のなかに出て、眼かくしをとられてみると、そこは独身将校宿舎の一室らしく、安っぽいペンキ塗りの壁に皮ジャンパーや武器の吊皮などがかけてあり、ヌード写真がべたべたピンでとめてあった。わたしは椅子をあてがわれ、平井が大コップ一杯の水をもってきてくれ、暫らく休息するようにといった。キャノンとグラスゴーは別室にひきとっていった。

△そうか、病人を途中で休息させる用意もしてあったのか……▽

かっきり三十分すぎ、彼らはまた現われ、キャノンが「もういいか？」とたずねた。運転手が呼ばれ、庭をひとまわり

してきて、人かげのないのを報らせ、わたしはふたたび眼かくしされて、車につれこまれた。

こんどはまあほど時間のかからないうち、街区の明るみから公園の繁みのような静けさのうちに入り、ゆるい傾斜をしばらく上って停車した。眼かくしのまま幾段かの石段を上る。玄関前のボーチらしい。内がわに入り、階上への階段にかかる。靴ざわりからして、大理石に重厚な絨毯でも敷きつめたような柔かい、しっかりした感触だ。部屋に入り、後のドアが閉まり、眼かくしをとられてみると、それは事務室に使われているらしい、机をいっぱい並べた広間だった。

窓辺と反対がわの壁に向って据えられた大きいソファに掛けさせられた。すっぽり腰をおとすと、後の凭れが頭より高くなるように、特別にあつらえたものようだった。それでも平井が「後を見ないでください」と、わざわざ注意した。ここで指紋をとられ、写真をばちばちやられ、また眼かくしで廊下の反対側の一室へ。場所を移すことに眼かくし。こんどはその蔽いをとられてみると、壁向きに自分が掛けさせられた金属性のトランクよりほか何もなく、手術室を思い出させるリノリウム張りのがらん洞の空間が、ぶきみに眼をうってきた。△拷問部屋だな▽と直感した。

つぎになにが始まるか？……砥ぎすまされた神経で待ちうけるわたしの耳に、廊下を隔てた向うから、しきりに電話

を交換しているらしい声が遠くきこえてくる。しばらくして受話器をおく音。キャノンが廊下に出てきて、手下どもに、苦笑をもらしながら、

「そいつぁ、めんどくさいことになったぞ。三人の医者がみんな同じことをいつてるんだ。」

「どういふんですか？」と平井。

「ふん、それが、手荒なことをすると、いっぺんにまいるってんだ。」

「ひゃあ、それは……」と、平井がおべんちゃら声で笑った。だが、キャノンは考えこむようすで、

「しかたがない。まあ手間はかかるが、辛棒づくよくPropagandaでいくほかないだろう。」

声の主たちが部屋に入ってきて、キャノンがわたしの後に近づき、

「どうだ、きみ、ぼくらと話をつけないか？ いま医者に問い合せてみたら、きみは重病人だそうじゃないか。ゆっくり静養するんだな。立場をかえて、ぼくらと友だちになってさ。」

「おことわりしましょう。」

わたしは憤然とことわった。どんなめに合うかという不安を、先刻の電話でいくらかやわらげながら。だが、結局はいくところまでいく。医者がどういおうと、悪党どもが遠慮するはずはない。ひとまず *propaganda* だ。しばらくのあいだ

はまだ余裕がある。

キャノンはドスをきかせた低音で、ゆっくりと、

「きみがここにきていることは、世間じやだれも知っちゃいない。いつときはきみの失踪で騒ぐだろうが、まもなく忘れるだろう。きみは人知れず死にたいか、それともぼくらに協力するか？ どっちでも自分で選ぶがいい。」

「殺したらいいでしょう。」

「そんなこといったって、死ぬのはそれほどやさしくないよ。人間が耐えられるには限界がある。だれひとり、これまで耐えきたものはいないんだ。人間がいちばん苦しんで、いちばん長くかかって、死ぬまでほっとかれることになる。」

「じゃあ、そうして、もうずいぶん殺してきたわけだ。V

「どうぞ」と、わたしはいった。

キャノンは鼻を鳴らして、

「そうか。よし、そんなら。」

彼は手下どもをつれ、廊下に出ていった。なにやら打ち合せするもよう。わたしは待ちうけた。それはむきだしの体を手術台に横たえられ、執刀医の入ってくるのを待ち受けるような緊張だった。ひとつひとつの物音がびりびりひびく。じりじり時が迫ってくる感じ。それも、手術には終りがあるけれども、この場合は先の見通しがない。耐えられるか？ 耐えるほかない。耐えぬかなくてはならない。恥しいまねはゆ

るされない……。

そつと時計を見た。午後十時を少しまわっていた。やがて、入ってきたのはグラスゴーだひとりだった。わたしは強烈な裸電球を額が熱くなるほど近くさしつけられた。彼はまぶしい光線にくらくらしているわたしの耳もとに口を寄せ、

「あなたの名はなんといいますか？」

「知りません。」

「あなたはだれですか？」

「知りません。」

「あなたの名は……」

「知りません。」

ううむと呻って、頭を横にふるけはい。むずむずしてくるのを、やつとこらえている。また氣をとりなおし、同じことをくりかえす。ほかに術はない。一撃でまいるというのだったから。たまらなくなつて声を荒らげてみたり、拳銃の撃鉄を耳の後でがちゃつかせてみたり。△これがいちばんながくかかって、いちばん苦しむ方法というわけか……▽なにしろ「一撃でまいる」というのは、このさいこちらにとっての楯だった。だが、いつまでこんな無意味なことを続けるのだろう？ こうなれば、拷問を受けているのはわたしではなく、このあまり知恵のなさそうな乱暴ものの准尉の方だった。△まあ、やれるだけやってみるがよい。どうせ、こちらにと